**聖霊降臨節第２主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年５月26日**

**「信仰の門は開かれた」**

**詩編100編4～5節**

**100:4 感謝の歌をうたって主の門に進み／賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。**

**100:5 主は恵み深く、慈しみはとこしえに／主の真実は代々に及ぶ。**

**使徒言行録14章21～28節**

**14:21 二人はこの町で福音を告げ知らせ、多くの人を弟子にしてから、リストラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返しながら、**

**14:22 弟子たちを力づけ、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と言って、信仰に踏みとどまるように励ました。**

**14:23 また、弟子たちのため教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた。**

**14:24 それから、二人はピシディア州を通り、パンフィリア州に至り、**

**14:25 ペルゲで御言葉を語った後、アタリアに下り、**

**14:26 そこからアンティオキアへ向かって船出した。そこは、二人が今成し遂げた働きのために神の恵みにゆだねられて送り出された所である。**

**14:27 到着するとすぐ教会の人々を集めて、神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。**

**14:28 そして、しばらくの間、弟子たちと共に過ごした。**

**今年度、私たちの教会では第5主日礼拝後に「お茶会」を行います。新型コロナウイルスが流行する前に、毎月最終主日の礼拝後に行っていたものを再開することになりました。コロナ禍で十分持てなかった教会の交わりを大切にしたいとの思いから再開することになったわけです。ミニバザーも計画されているようでとても楽しみにしています。**

**教会で礼拝後にお茶を飲んであれこれお話をする、そういった交わりってとても大切だなと思います。普段人と話す機会があまりなくても教会に行けば、皆で礼拝をして、礼拝でいただいた恵みを分かち合い、また日頃からの恵みだけでなく悩み事や心配なことも分かち合って、共にお互いの近況がよく分かって祈り合って支え合っていくのです。そういった交わりの中で私たちの信仰が育まれていくのです。**

**私の母教会の名張教会は私が教会に通い始めたころ、ちょうど今から30年前ですが同世代の青年が多くいました。礼拝後青年のメンバーで食事をしたりお茶をしたり、賛美をしたり、色々な話をしたりとその交わりがとても楽しかったです。私は教会に通い始めて間もなかったのでキリスト教のことも教会のことはよくわかりませんでしたが、こんな自分がここにいていいんだとその交わりに加えられている、今日の説教の題で言うならこんな私にも「信仰の門が開かれて」いることがとても嬉しくて教会に通い続けました。そうして教会生活を続けていく中でやがて洗礼へと導かれました。信仰の門の中へと入っていき、信仰の道を歩み始めたのです。**

**この世の中には職場とか地域とか色々な交わりがありますが、やはり教会の交わりは他とは違います。それはその交わりの中心にイエス様がおられるからでしょう。イエス様を中心とした交わり、互いに愛し合い、互いに祈りあい、慰めあい、励ましあう、その交わりの中で私たちはたとえ悩み多い人生であっても、決して希望を失わずに前を向いて私たちの信仰の道を歩んでいけるのです。**

**パウロの第一次伝道旅行はリストラから東に約100キロメートル離れた町であるデルべに進みました。パウロとバルナバはこの町でもイエス・キリストの十字架と復活の福音を宣べ伝えて、多くの人が信仰に入りました。デルベにもキリスト教会が誕生し、デルべの教会の信仰の門は開かれてその門から多くの人が入ってきて信仰の道を歩んだのです。**

**デルべでの伝道は成功したと言えるのでしょう。パウロたちは次の町に進みます。けれども21節後半には不思議なことが書かれています。「リストラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返し」たのです。私たちが普通に考えれば東に向かって伝道の旅をしているのですから、さらに東の町に進むと思うのです。東に100キロメートル進めば、パウロの生まれ故郷のタルソスがあります。故郷で伝道してまだ教会のないタルソスに教会を作った方がよさそうな気がします。そこからさらに陸路を進めばパウロとバルナバを伝道旅行に送り出したシリア州のアンティオキアがあります。タルソスに進み、さらにアンティオキア教会にに戻って教会の皆さんに歓迎されて「よくご無事で帰ってきてくださった」と喜んで迎えてくれるでしょう。**

**けれども、パウロたちはそうしなかったのです。デルべまで進んできた道を引き返したのです。21節を新共同訳聖書で読むと、通ってきたルートを引き返すことが主な目的で、その途中でそれぞれの町に寄っているような印象を持ってしまいます。けれども原文を直訳しますと、「リストラに、またイコニオンに、またアンティオキアに彼らは帰った」なのです。彼らは引き返していくことが目的ではなくて、リストラに帰る、イコニオンに帰る、アンティオキアに帰ると、帰るということが目的だったのです。どこに帰るのか。教会です。第一次伝道旅行でリストラの町に、イコニオンの町に、アンティオキアの町にキリストの教会が誕生しました。そこには多くの信仰の門を入って信仰の道に入った多くのキリスト者がいます。その教会に彼らは帰るのです。**

**でも、それがいかに危険なことかは火を見るより明らかです。リストラではパウロはユダヤ人たちから石を投げつけられて死にそうになりました。イコニオンでは異邦人とユダヤ人が指導者と一緒になってパウロとバルナバに乱暴を働き、石を投げつけようとしました。アンティオキアではねたみに支配されたユダヤ人たちが、神をあがめる貴婦人たちや町の主だった人々を扇動して迫害させました。リストラ、イコニオン、アンティオキア、いずれの町でもパウロたちは激しい迫害を受けて他の町に行かざるを得なかったのです。パウロたちが再びこれらの町を訪れたらまた激しい迫害に会うでしょう。しかし、彼らはそれを十分承知の上でリストラの教会に帰るのです。イコニオンの教会に帰るのです。アンティオキアの教会に帰るのです。**

**「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」パウロのこの言葉から、パウロたちが去ったそれぞれの教会は激しい迫害にさらされ多くの苦しみを受けていたと考えられます。パウロたちはそんな教会の人々を力づけて、信仰に踏みとどまるように励ましたのです。これはただ単に「頑張れ」とか「迫害に負けるな」と励まして応援しているのではありません。「励ます」は「慰める」と同じ意味の言葉です。生まれたばかりのそれぞれの教会のキリスト者たちが信仰に踏みとどまることができるように主の慰めを与えるのです。「主が共にいてくださる」「どんな迫害や困難に遭っても主が共にいてくださるんだ」「だからこそ私たちは信仰に踏みとどまることができるんだ」と主の十字架と復活によって救われた希望である主の慰めを与えるのです。**

**その上で、それぞれの教会に長老を任命します。これは教会の指導者と考えていいでしょう。生まれたばかりでまだ確固たる指導者がいない教会です。パウロもバルナバもずっとその町の教会にいることはできません。その中で教会は迫害にさらされているのです。ですからパウロとバルナバは自分たちに代わる指導者を立てて、断食して祈って、教会を信じる主に任せたのです。パウロたちは自分たちがいなくなっても、教会の人々が迫害に負けてしまわないように、教会がしっかり立ち続けることができるように、主に委ねつつ教会を整えたのです。**

**パウロとバルナバが聖霊の導きによって第一次伝道旅行に送り出されて訪れて誕生した、リストラの教会、イコニオンの教会、そしてアンティオキアの教会この教会にパウロたちは帰りました。迫害に会う教会のメンバーに「主が共にいてくださる」主の慰めを与えるために。指導者たちを立てて祈りと断食をし、主に信頼してお任せして教会がしっかり立ち続けることができるように教会を整えるために。それは言い換えれば伝道によって生みだされた教会を牧会するためです。彼らが行ったことは牧会です。パウロたちは牧会のために教会に帰ったのです。伝道して教会を生み出しておいてあとはほったらかし、野となれ山となれ、神様が何とかして下さるから後は知らない、というのではありません。迫害に苦しむ生まれたばかりの教会がどんな様子か、今この教会にどんなことが必要なのか、どんな助けを求めているのか、実際に尋ねることでしかわからないことも多々あるでしょう。だからこそ、それぞれの教会を尋ねて共に悩みも苦しみも喜びも分かち合あって、主の慰めを与えて教会を整えて必要な牧会を行ったのです。**

**生まれたばかりのリストラの教会、イコニオンの教会、アンティオキアの教会は異邦人を中心とした教会です。立派な指導者もいなければ、組織としても整っていないでしょう。パウロたちを送り出したシリア州のアンティオキアの教会と比べるとなんとも頼りない教会だったと思われます。だからこそパウロたちは教会を牧会することで、教会を整えて、教会で正しく御言葉が語られて正しく御言葉が聴かれて、聖餐の恵みに預かり、イエス様の十字架と復活の救いを中心とした交わりがなされるように導いたのです。互いに愛し合い、互いに祈りあい、慰めあい、励ましあう、その交わりの中で異邦人を中心にしたキリスト者たちの信仰が育まれていくように導いたのです。そして、教会の門が開かれて、さらに異邦人に信仰の門が開かれて信仰の道に入っていく人たちがさらに与えられていく、その様子を目にしたのです。それは決して自分たちがした働きの功績ではない、そこに聖霊が働かれてなされた神様の偉大な業を見たのです。**

**パウロたちはそれぞれの教会を主の御手に委ねて教会を後にして、自分たちを伝道旅行に送り出してくれたシリア州のアンティオキア教会に戻ってきました。そしてすぐに教会の人々を集めて、伝道旅行の報告を行いました。そこでなされた報告は、神様が自分たちと共にいて行われたことと、異邦人に信仰の門を開いて下さったこと、それこそが教会の姿であるということです。迫害という困難な中でも主が共にいてくださり、イエス様を中心とした豊かな交わりがなされて、しっかりと立ち続けて信仰の門が開かれているのです。リストラの教会、イコニオンの教会、アンティオキアの教会、それは主の教会である、主イエス・キリストを中心とした教会である、ここには主の恵みが溢れている、豊かな交わりがなされて、信仰の門が開かれている、そのような喜びの報告をしたということは、それはつまり証しをしたと言っていいのです。そう、パウロたちが行ったのは単なる業務報告ではなく、教会に生きる喜びの証しなのです。**

**先週の火曜日に諏訪地区牧師親睦会が日本イエス・キリスト教団岡谷教会で行われました。私は諏訪に来て初めて超教派の牧師の集まりに参加をしました。この集まりも新型コロナの影響で5年ぶりだそうです。私が岡谷教会に到着したのとたまたま同じタイミングで他の教会の先生も到着しました。私は初めてでわからないですからその先生の後について岡谷教会に入ろうとしました。私の前の先生が岡谷教会の戸を開けようとして押しても引いても開かないのです。すると玄関の中にいた岡谷教会の田中先生が申し訳なさそうに笑いながら「これ開き戸でなくて引き戸なんですよ」と教えてくれました。わたしの前の先生は苦笑いして「久しぶりで忘れていました」と言われていました。そうしてその先生と私は岡谷教会の中に入ることができました。**

**私たちもまたパウロたちが行ったように喜びの証しをするのです。イエス様が私たちといつも共にいて行って下さることを証しするのです。教会の門、信仰の門はいつでも誰にでも開かれている、その門を開いて下さっているのはイエス様であることを私たちは証しするのです。そして、この私もまたその門を入って信仰の道に導かれた一人であることを私たちは証しをするのです。私たちが教会に生きて、イエス様を中心とした豊かな交わりの中で互いに愛し合い、互いに祈りあい、慰めあい、励ましあって、苦しいことや悲しいことや辛いことの多い人生ですが、教会の交わりの中で私たちは決して希望を失わずに前を向いて私たちの信仰の道を歩んでいけることを喜びをもって証しをしていきたいのです。**

**私たちができる証しは「教会の戸は開き戸ではなくて引き戸ですよ」という小さなものかもしれません。でもその小さな証しで教会の中に入ることができる人がいるのです。私たちは教会に生きる喜びをもって、教会の戸・門は誰にでも開かれていて誰もが信仰の道に入ることができることを伝えていきたいと思います。**